週刊やすいゆたか161号**14年11月６日**

**対談二〇一四年を振り返って**

河内輝久:「ウェブマガジンプロメテウス」の読者です。年齢はやすいさんより二回りほど若い45歳です。仕事は普通のサラリーマンということにしておいてください。今日はやすいさんのホームページである『やすいゆたかの部屋』がこのところ開けないので、毎回楽しみに読ませて頂いていた「週刊やすいゆたか」も途切れていますし、ご病気ではないかと心配になりまして、連絡を取らせていただいたところ、お会いしてお話を伺うことになりました。やすいゆたかの二〇一四年を振り返ってということで、始めたいと思います。

やすい:いや、ご心配おかけして申し訳ありません。「やすいゆたかの部屋」はサーバーの故障です。それでサーバーの修理は終わったのですが、私の部屋の分はサーバーに保管できていなかったようで、上げなおさなければならないのですが、ＦＴＰにアクセスするのにパスワードが変わっていたようで、再通知してもらわなければならず、そのために住民票を取りに行ったりして、娘の助けもあり、やっと12月４日に再開できました。

河内:そのせいで「週刊やすいゆたか」が途切れたのは残念ですね。

やすい:「週刊やすいゆたか」はこのところ多忙で一月ほど遅れていたのです。youtubeを八月末から始めまして、これが大変な作業ですから、まだ慣れていないことも有りまして、なかなかはかどりません。

河内:もうずいぶんたくさん入れられましたね。あまり多いので、かえって気後れしてあまり拝見していません。

やすい:そうよく言われます。別に老人の禿頭を見ても大して意義がないので、書いたものを読んでいただければそれで十分ですね、あれはいわば苦肉の策ですね。何か打つ手はないかと考えあぐねた末にやはりこれしかないかということで始めたのです。

河内:苦肉の策ということは、「ウェブマガジンプロメテウス」の読者を増やそうということですか？

やすい:ええ、それもありますが、折角『ビジネスマンのための西田哲学入門』や『聖徳太子の大罪』を書いても、出版事情が厳しくて、なかなか出版にならないわけです。youtubeで講演を流せば、少しは知れ渡って、出版の条件ができるのではないかという目論見ですね。

河内:それはなかなかアクセスはないでしょうね。youtubeの映像で流すのだったら、講演そのままではなく、現地に行って取材したところの映像を流したり、解説を動画にしたり、色々工夫しないとただ講演だけでは人の話をゆっくり聴こうという人は少ないですからね。

やすい:そりゃあそうですね。ただ私も八月にビデオカメラを買ったばかりで、一人で撮影から編集からしているので、これからぼちぼち進化させていくしかないのです。

河内:それにしても『ビジネスマンのための西田哲学入門』は西田哲学をビジネスマンの仕事や生き方に役立てようという興味ふかい試みなので、ある程度は売れそうですがね。

やすい:そう言っていただければ心強いです。実際経営学でも野中郁次郎先生が『知識創造企業』で「暗黙知」の説明で西田哲学を援用されたり、企業の中には西田哲学で従業員の士気を高めようという試みがされているわけです。それでビジネスマン向けの西田哲学入門というのはタイムリーではないかということですね。

河内:それに西田哲学というのは絶対無の自覚にたっていわばゼロから危機突破の方法を考え直そうということで、一九九〇年以降の長期デフレ不況からの脱却を模索している日本経済にとって、うってつけの哲学ではないですか。

やすい:でしょう、そうなんですよ、アベノミクスにしてもそのあがきの一つですが、やはり西田哲学を踏まえて、ゼロから再生するつもりで改革に取り組まないと、一千兆円を超える財政赤字の解消、経済の再建はあり得ませんね。

河内:『聖徳太子の大罪』は、これまでやすいさんは梅原猛研究の中で歴史研究を蓄積されてこられたのですが、いよいよ梅原猛研究の枠にとらわれないで、日本古代史をそれこそゼロから見直されたものですね。

やすい:いや『聖徳太子の大罪』も梅原猛先生の怨霊史観の貫徹なのです。梅原先生は、平和で豊かな国造りをしていたにもかかわらず大國主命が奇襲作戦で斃されたので、それで怨霊として祟ると恐れられて出雲大社などが作られたとしています。しかしそれ以前の三貴神まで怨霊史観の観点から見直すことはされていません。世阿弥や千利休の方に怨霊史観を適用しているのです。

河内:そうですか、梅原先生はやすいさんの三貴神の天降り建国説についてはご存知ですか？

やすい:もちろん原稿はお送りしていますが、ご多忙ですし、そのうち拝読しますという挨拶の葉書はいただきましたが、果たして読まれたかどうかは分かりません。怨霊史観を天照大御神や月讀命まで遡らせ、聖徳太子に神道大改革の大罪を認めるところまで梅原先生がお認めになれるのか、ちょっと難しいかな？拙著『キリスト教とカニバリズム』(三一書房)で帯に梅原先生に推薦文を頂いた時も、梅原先生は「聖餐による復活」仮説について「可能性はある」というスタンスでしたね。今回も同じじゃないでしょうか？

河内:そりゃあ梅原先生が天照大御神が天降りして、大和・河内倭国を建国したとか、聖徳太子が主神・皇祖神を差し替えたとか言ったら、それこそ「殿ご乱心」扱いでしょうね。やすいさんの説はそれだけ異端だということになりますね？

やすい:残念なのは、結論の部分だけで異端視されてしまうということですね。方法論や論証のプロセスなどを論じながらそういう極論は成り立たないと批判されるのなら、こちらも反論しようがあるのですが、結論から見て、シカトされてしまうことです。

河内:学界とか世間とかいうものはそういうもので、クリエイティブな試みをしても大部分は空振りで終わっているのかも。まあ中には脚光を浴びる方もおられるわけですが。でもやすいさんの場合は、まだ一応、独創的なデンカ―としてある程度知名度があるだけましでしょう。

やすい:ええ、それはウェブ文化のお陰でしょうね。万年非常勤講師ですから、大して出した本が売れなかったら、そのまま埋もれてしまっているところです。専任の哲学教授や学会では高名な先生方でもウィキペディアの「日本の哲学者」に掲載されていないのに、私の場合は、ウェブで発信することで出版できないのをカバーしようと頑張っているので、哲学・思想や歴史などでウェブで調べていると、私の文章や名前に出会う頻度が高いわけです。それで知名度が上がっていることは確かですね。

河内:それはあるかもしれませんが、そういう捉え方は卑屈ですね。私は、やはりやすいさんは常にブレないで、50年間取り組んでこられた人間を根底的に捉え返す人間論ですね、それをネオヒューマニズム宣言として掲げ、21世紀の思想をリードするんだという気概を示されている。世界史や日本古代史も根底的に捉え返す視点を打ち出しておられる。三千年にわたる中国思想史を概観されて、伝統思想の重みを踏まえた思想改革、社会改革のイメージを模索されている。そういう業績が浸透してきているということではないでしょうか？

やすい:そう思いたいのはやまやまですが、まあ河内さんだけでもそう評価していただければ、私がこの世界に存在する意義があったということでしょう。

河内:そういう流れで、今年はいよいよyoutubeデビューされたわけですね。石塚正英さんが上越市で頸城野郷土資料室を立ち上げられて、郷土史関係のyoutube講演をされているのに刺激されたのでしょう。

や すい:石塚さんのバイタリティはすごいですね。毎週末上越に戻って、郷土で活動されている。そして今年はいよいよ石塚正英著作集を社会評論社から出されています。彼も50歳近くまで非常勤講師だったのじゃないでしょうか？超人的な著作活動をされていたのに、専任になかなか成れなかった。私の勝手な想像ですが、あまり大物すぎて、大学の実権を取られてしまうと敬遠されていたのじゃないでしょうか？田上孝一さんがなかなか専任に成れないのも業績がありすぎのせいかもしれませんね。

河内:そう言えば、単著どころか論文も書いていない人が何故か堂々と大学教授だったりすることもありますね。やすいさんも業績がありすぎたのですか？

やすい:大学の人事基準については、私には全く分からないので、論評できませんね。『人間観の転換』一九八六年刊は、内容が『資本論』批判だったので哲学科の先生たちには哲学とは思えなかったこともあります。分野が経済哲学で需要が少ない上、やはり奇説としか見なされなかったのではないでしょうか？人間論の領域を広げて評価されようとしたのですが、発表していたのが、マイナーな『月刊状況と主体』ですから、大して目に止まらなかったこともあります。最近は社 会的諸事物や環境的自然、組織体なども包括した人間観をネオヒューマニズムと名づけてウェブで発信して、それが浸透しつつあるようで、昔みたいな奇説扱いはされていないようですね。でも既に歳を取り過ぎていたのかもしれません。

河内:現在、大学で講義されている『長編哲学ファンタジー鉄腕アトムは人間か？』と『長編哲学ファンタジーヤマトタケルの大冒険』の講義も続々と youtube化され、立命館大の教職倫理学の講義も入れられています。それが一段落したら、人間論や中国思想史なども是非入れてください。『やすいゆたか著作集』をまるごとyoutube化されたらどうですか？

やすい:そんなことをしたら、新しい展開ができなくなってしまいます。今もそれが一番悩みですね。本当は西田幾多郎先生のように、58歳で引いて著作に専念が理想なのです。経済的に追い詰められていなければ、あくまで著作に専念したいところです。なにしろ万年非常勤講師というのは、まことに悲惨な境遇ですから、年金も雀の涙ですし、退職金もありませんね。一コマでも減らされたら死活問題なのです。

河内:いよいよ古稀が間近になられているのですが、大概の高齢の研究者は総括で精一杯でしょう。新たな展開を目論んでおられるのですか？

やすい:人間論の深化としては、存在論的な人間論を深めることです。つまり神とか人間とかは生物や他の事物とは別に存在する、事物の種類ではなくて、事物の存在の在り方ではないかという問題意識です。

河内:それはネオヒューマニズムにはなかった観点ですか？人間は存在のカテゴリーだという形で「『カテゴリーとしての人間』論序説」という論文を一九九三年に書いておられたでしょう。

やすい:そういう意味ではそうなのですが、古代史研究で日本的な神観念が分かってきまして、人間や事物と別に神がいるのでも、神霊が宿っているのでもない、人間や事物の存在の在り方が神だということですね。

河内:汎神論というのはそういうことでしょう。それを人間論でいけば汎人間論ですね、ネオヒューマニズムは包括的人間論ですが、言い換えれば汎人間論でしょう。

やすい:凡ての事物が神だとか人間だとかいう場合に、即自的にそうなのではなくて、人間関係に包摂されて、人間関係を取り結んでいる事物の在り方が人間だということです。同様に人間との関わりにおいて聖性を帯びた在り方が神だということですね。どれも神、どれも人間と言っても、事物は様々な在り方をしているので、それが神と呼ばれる条件や、人間を構成する要件を明確にしないと説得力がないのではないかということです。

河内:宗教論でもかなりのキャリアになられたので、エッセイ集『宗教のときめき』を膨らまし、ある程度学的な体裁を整えて、『二千年代の宗教』とか、『みんなの宗教三Ｌ教』とかもまとめて欲しいですね。そういうのなら出版社もつくかもしれませんよ。

やすい:そんなに甘くないですよ、自費出版なら喜んで出してくれるのですがね。ただ何かヒットを飛ばせば、別ですが。宗教に関連して、高齢化してきたので葬式をどうするかで、両親と同じキリスト教会でするのか、それとも無神論者としてお別れ会ですますのか、はっきりしろと家族に言われています。私としては三Ｌ教の葬儀というのを自分でデザインしてみたい気持がありますが、なにしろ臆病ですから、そういうことはあまり考えたくない方ですね。

河内:三Ｌ教は教団も教祖もいない、光と命と愛を大切だと考える人はみんな三Ｌ教徒だということですが、その考えを広めるにはやはり組織体が必要でしょう。

や すい:ええ、教団というより交流会や教徒の親睦会のようなもの、あるいは三Ｌ教の精神を体現して運動する各種のボランティア団体や文化団体があればいいのですが、私は組織力が全くなくて、常に一匹狼なのです。河内さんが先ず起ち上げの音頭をとってくれますか？

河内:それは考えておきます。起ち上げとなるとそれに人生かけないといけないので、いろんな活動を抱えているのでどうしても二の足を踏みますね。

やすい:でしょうね。いろんな思想や宗教を語り、人に呼びかけたり賛同を求めたりはできるのですが、組織体を作るとなると大変ですね。それだけ人の心を動かして行動させ、組織にまで形にするということはすごいことですね。「感動」というのは感じて動くということです。私も哲学者や思想家なら人を感じて動かせる言葉を語らなければならないわけです。できたら組織にまで結実させ、さらに世界を圧倒させなければならない。それで中途半端では駄目だと絶対無に立って一から世の中を組み替えるようなことを言いますと、かえって浮いてしまいますね、そういうジレンマです。　　　　　　　　　　　　　続く